

研 究 成 果 報 告 書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学芸術文化学部 プロジェクト授業「空間分析」
- ・所属ゼミ
- ・指導教員 大氏正嗣
- ・代表学生
- ・参加学生 全 21 名

【研究課題名】富山県内の有名建築・土木構造物の調査と、その空間構成の分析・理解

1. 課題解決策の要約

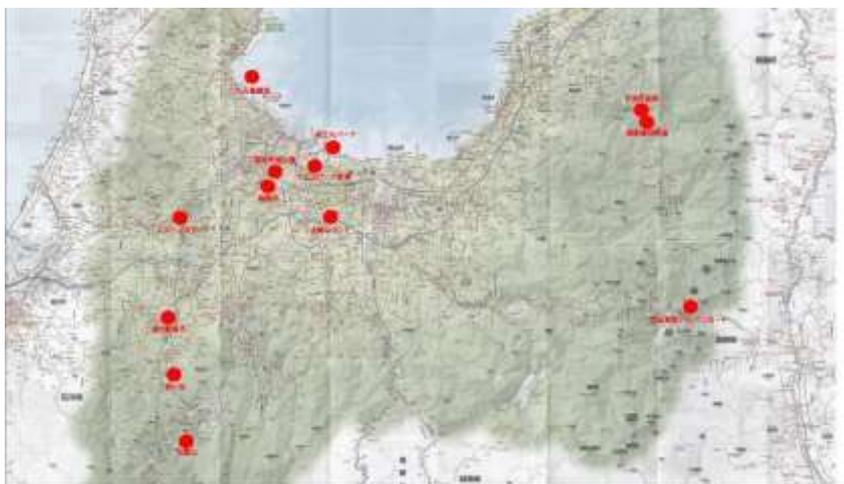
富山県内で埋もれている既存資産を活用するための方策を新たに構築する。その過程で、学生たちへの教育的効果を期待する。

2. 調査研究の目的

富山県は豊かな自然環境に恵まれ、地域や自然環境を背景に生み出された素晴らしい建築物や土木構造物も各地に存在している。しかしながら、観光客の反応を見ると自然に関する関心は見て取れるが、「黒部立山」、「氷見」、「五箇山」などの県の周辺域に位置する名所が主体となっており、県内の様々な場所を巡る様子は見取れない。

観光客が県内全域に目を向ける方策として、新たな名所を作ることは容易ではないが、既にある施設を浮かび上がらせることは可能である。ただ、単純にそれらをピックアップして紹介したとしても、目の肥えた観光客からすれば全国他地域との比較で優位になる訳ではない。

そこで、一般的な施設紹介ではなく施設に新たな物語を与えることでより深い意味付けをしようと言う試みが今回の計画である。



また、その過程において取り組む学生の空間認識の向上、プレゼンテーション能力の向上を企図している。

富山県内の主要な名所

3. 調査研究の内容

本調査研究を実施する上で、富山大学芸術文化学部で開催している「空間分析」というプロジェクト授業を活用する。この授業は、建築物内の空間を認識してそれを持つ意味を分析・理解しようという取組の一環である。富山県内の著名な建築物あるいは土木構造物を現地でじっくり調査・分析し、その空間が生み出す効果について学生が体験しながら理解・検証するものである。

しかし、漠然と空間を体験するだけでは教育効果が薄いためいくつかのテーマを与え、そのテーマに合致する空間を見つけ出すこととしている。実際に、本年度は富山市内の4施設を回り、その空間構成の理解や最も優れていると感じられる抽出を行った。また、単純に空間を見出すだけでなく、その空間を舞台として想定される物語を学生たちがストーリーに仕立てることを試みた。

本年度の対象施設は、初年度と言うこともあり富山市内の

- ・富山県立水墨美術館
- ・富山県立高志の国文学館
- ・創造の森越中座
- ・リバートリート雅楽俱

を選定した。



水墨美術館調査の状況



高志の国文学館調査の状況

また、学生たちに課題として与えたキーワードは、「ひとめぼれ」、「再会」、「嫉妬」という3つのキーワードとしている。恋愛に関するキーワードを採用したのは、南砺市で進められている「恋旅」などのプロジェクトが若者たちに一定の浸透を見ていることが挙げられる。情報の拡散を考えた場合には、一定以上のインパクトを与えることと、若年層への波及効果を狙う方が広がりが見られるという目的に沿っている。

プロジェクト授業では、各学生が4施設×3テーマの組み合わせを考えた上で、学生一人当たり2つのストーリーを生み出すこととした。

なお、このプロジェクトについては、取り組みを如何に広報するかが重要であり、本助成の対象外ではあるが、別途企業協賛を受けた費用を用いて優秀なストーリーを作成した学生が、その施設を設計した建築家あるいは建築や土木の研究者にヒヤリングに行くことを4月以降に計画している。

さらに、作成したストーリー並びにヒヤリングの状況を、企業広報用パンフレットに掲載する方向で調整を進めている。なお、この掲載は将来的には一般雑誌への掲載を視野に入れている。これは、富山における取組を全国的に紹介するという広報効果の実証実験を兼ねている。

原状、県内有志の努力のより富山県建築マップの暫定版が既に創り上げられている。ただ、それは一般的なガイドブックと同様に単純に歴史的あるいは著名建築物の紹介となっており、建築に興味を持つ者以外が手に取る様なものではない。しかし、本取組は全く異なった新たな広報活動として生かせると考えている。単年度では困難ではあるが履歴を積み重ねることで、県内観光用のガイドブックに活用することができるであろう。

4. 調査研究の成果

本年度は、プロジェクト授業には21名の履修生を受け入れた。
まず、平成27年10月12日にバスにより上記4施設の見学を実施した。



水墨美術館



高志の国文学館



創造の森越中座



リバーリトリート雅楽俱

調査後は、大学内で学生間のグループディスカッションにより、空間の特徴や効果を抽出することを最初に実施した。普段漠然と考えている雰囲気を、リアルに理解した考えることで、設計者が意図する空間の意味を読み取る練習を行っている。

次に、各自が与えられたテーマに沿って考えた空間理解をプレゼンテーションし、教員や他の学生との間で空間の持つ意味についての検討を深めた。



学生によるプレゼンの状況

これらを踏まえた上で、各自が考える空間の良さと、そこで繰り広げられる想像上のストーリーを文章化する作業を作り出す作業を2度にわたって繰り返した。

現在、空間理解が優秀作品の選定を行い、広報誌掲載を見据えて文章の修正を準備している。

教育面で、学生のヒヤリングによる評価から非常に面白く考えさせる取り組みだという肯定的な意見をj得ている。

5. 調査研究に基づく提言

本研究は、複数の要素が組み合わされているため、4か月間の取組で直ぐに明確な結果や提言ができる訳ではない。ただ、少し調べるだけでも富山県内には素晴らしい建築物や土木構造物が容易に見つかることがわかる。

しかし、それらを単純に建築・土木構造物という位置づけで活用しようとしても、その効果や波及範囲は限定的である。こうした優れたコンテンツこそ、そこに付加する新たな要素を考え出すことで地域からの発信を強力にバックアップする素材となり得る。また、コンテンツそのものだけでなくコンテンツを活用する取組自体が発信力を持ち得る素材であるという認識が重要ではないかと考えられる。

本プロジェクトは、今後も外部資金を得て教育の一環でありながら、特色ある地域を発信する取組として実証実験を継続していく。同じような取り組みは、建築・土木構造物に関わらず可能な手法ではないかと考えている。

6. 課題解決策の自己評価

原状、建築を理解するという教育面において一定の成果を得た。ただ、地域資源を発掘し広報用資料に役立てるためには、継続的な取り組みが必要になる。その最初の試みとして本授業における成果を企業広報用パンフレットに掲載するという試みを現在継続中である。その効果の状況を見て、今後の取り組み方法について検証を続けていきたい。